

## 「共苦」—— 弱さを重ねること

佐々木 炎 *Sasaki Honoo*  
ホッとスペース中原・神奈川県川崎市

70歳代前半の茂さん（仮名）は要介護4。生活保護受給者で脳梗塞の後遺症を抱え、独り古びたトタンの小屋にいた。タバコのヤニと糞尿の異臭、六畳一間の部屋はゴミが散乱し隙間風が吹いていた。ポロポロの布団が掛かったコタツの上には山盛りのタバコの吸殻と焼酎の瓶。茂さんは万年床化したコタツの中に身を横たえていた。やせた身体、こけた顔、ぼうぼうのヒゲ、近寄るとアルコールの匂いがする。初回訪問。アセスメントの後にサービスの紹介をしても反応はほとんどない。「ケツの床ずれが痛い」「何か食いたい」とだけ要望があり、ヘルパーさんを派遣することになった。しかし暮らしは変わらず、他人を拒絶し、酒の勢いでヘルパーさんに絡むことも。ある事業所は早々に撤退した。

打つ手が見えずお手上げに思えたある日、訪問すると茂さんは便失禁で困っていた。ゴム手袋が見当たらず素手で処理した。床ずれの皮膚を見て「痛かったですよ」と思わず言葉が出た。すると彼は自分の過去を語り出した。父子家庭だったこと、土木作業員だったこと、病気で息子を亡くしたこと、それがつらくて酒やギャンブルにおぼれてしまったこと、妻子が家を出て家族が崩壊したこと、病気になったこと、転げ落ちていった人生を告白してくれた。

「オレはダメな男だよ。オレなんか死んだほうがいい。生きていても意味がないんだよ」

実は私が生まれた家も、まさに茂さんと同じような貧しい小屋。いや、電気も水も通っていなかった。精神疾患の父親、私は妾の子として村八分で親戚付き合いもない悲惨な状態だった。青春時代、貧しさと社会の風当たりの厳しさから家を飛び出した。だが非力な私はすぐに、「オレはどうせダメな男。生きていても意味がない」と茂さんと同じ言葉を吐き、自暴自棄になり荒れた。そんな私を救ったのは、私を信じてかかわり続けてくれた人たちの存在だった。私は茂さんの想いにふれたとき、自分の過去の傷を思い出し、「いや、生きる意味がきっとある」と願わずにいられなくなった。

以前の私は利用者の生活を対象（object）にとらえ、生活の阻害要因を見つけ取り除くこと、つまり課題の処理を最優先していた。一方で、目の前に生き暮らしている人の心に飛び込んで理解することや、自分のなかに取り入れて共有することをおろそかにしていた。でも今度の経験から、人の痛みや悲嘆に私自身の苦悩や傷、弱さや失敗、挫折を重ね合わせることの大切さを知った。それができたときに、相手に秘められた生きていこうとする強い力が再び動き出すのだということを知った。そう、実際に茂さんは自分を生きはじめたのだ。この「共苦」こそが私の持ち味であり、相談援助職として活かしていくべきものだと言われた。今もこれからも、利用者の人生の苦悩を分かち合っていきたい。